

「文芸と思想」既刊号

総目録

第1号 (昭和25・11)

サント・ブーヴと歴史 讚井 鉄男  
ケルト民族とその文学復興の精神

メリー・ウェブとその小説 中島 源治  
石本 キミ  
枕草子における物づくしの章段

目加田さくを  
心敬—その作品の非仏教性について

井手 恒雄  
古事記伝について 倉野 憲司  
江島生島事件と当時の演劇政策

前田 淑  
婚姻自由の原則に対する制限 安部 弘  
ゲートルに於ける生の形式 山田 輝彦

第2号 (昭和26・3)

倉野 憲司  
「天地初発之時」の訓義  
詩・書に於ける天及び天命の考察

米田 登  
玉泉 大梁  
村井 観亮  
中世の自由思想  
自由意志

遺伝と環境

板垣 恭三

J・M・シングの劇に於ける悲劇性

中島 源治

テニソンの「聖杯」とその伝説の変遷

石本 キミ

第3号 (昭和26・7)

大鏡の文芸性序説—その(一)主題について—

北西鶴太郎

幽玄—仏教との関連に於いて—井手 恒雄

枕草子の系流 目加田さくを

中国古代に於ける「中」思想の展開

米田 登

古代形容詞の語幹について

万葉集四二五番の左註について 麻生 朝道

書評・倉野憲司氏著「古事記序文註釈」  
井上 富蔵  
笹月 清美

第4号 (昭和27・1)

「イーノク・アーデン」に就いて

下条 信敏

イギリスに於ける近代悲劇の展開

中島 源治

「マクベス」における魔女の性格について

大鏡の文芸性

小島 信之  
北西鶴太郎

記紀の歌謡に於ける二三の問題

倉野 憲司

婚姻の自由と夫婦の平等

安部 弘

合自然的人生観の克服

村井 観亮

—プラトン「ゴルギアス」に於ける—

第5号 (昭和27・7)

悲劇作家としてのゴールズワージー

中島 源治

ギヤスケル夫人の小説

石本 キミ

ゲートル及びシラーのcantata観についての—

考察 小林保太郎

あめりか通信 森岡 栄

助言教官の面接技術に関する一考察

町田 恭三

平家物語序説—文芸論における封建的傾向  
について—

高橋氏文考 井手 恒雄  
倉野 憲司

第6号 (昭和28・1)

詩・書と孔子の天及び天命の思想

米田 登

自然と法(上)

村井 観亮

— プラトン「国家篇」における—

生存権の保障と扶養について 安部 弘

エヴァンジェリンに就いて 下条 信敏

「マクベス」における魔女の役割について 小島 信之

源氏物語における古物語性の問題(一)

目加田さくを

大鏡の文芸性(承前)

上代国語の代名詞について

第7号 (昭和28・7)

法華経玄賛の古点について 春日 政治

九州方言状態の史的三段層分派について

藤原 与一

「雁」 亀井 孝

「雁」 倉野 憲司

仮名遣ひの問題

— 桑原武夫氏の所説について—

徒然草と仏教 井手 恒雄

源氏物語における古物語性の問題(二)

— 宇治十帖を中心として— 目加田さくを

大鏡の描写技法

北西鶴太郎

第8号 (昭和29・1)

人間形成と教育—教育の本質に関する一考

察 藤原 英夫

自然と法(中)— プラトン「国家篇」にお

ける— 村井 観亮

家庭の愛情と子供のパーソナリティ

町田 恭三

配偶者の相続権とその相続法上の地位

安部 弘

ドロステ・ヒュルスホフの特異性

小林保太郎

人としてのステイヴンスとその名作詩集

「子供の詩園」 下条 信敏

「マクベス」の宇宙 小島 信之

Hart Crane の詩の意義 福岡 欣一

エヴェリーナ雑観 石本 キミ

第9号 (昭和29・7)

宣長の「もののあはれ」 井手 恒雄

— 武田宗俊氏の提唱をめぐって—

智恵鑑の典拠論(1) 目加田さくを

— 智囊との関連よりみたる—

ハムレットの思想 小島 信之

自然と法(下)

村井 観亮

性格検査作製の意図 町田 恭三

A Pattern of Human Salvation

福岡 欣一

— Of Human Bondage and Sons and

Lovers. —

笹月清美教授追悼

春日政治・高木市之助・小島吉雄・倉

野憲司・森岡 栄・井手恒雄

笹月教授略年譜および著書・論文・講

義題目目録

第10号 (昭和30・7)

「もののあはれ」の伝統と平家物語

井手 恒雄

明治前期の国語教科書について

古田 東朔

「筑紫」攷 北西鶴太郎

「奈何可」の訓について 倉野 憲司

奇異雑談集の語彙について 目加田さくを

近松の女性像に関するノート 前田 淑

楫取魚彦自筆「土佐日記県居説」(上)

第11号 (昭和31・1)

論語・孟子を通して観た義と仲とに就いて

米田 登

実親子関係と父性の推定 安部 弘  
市民革命としてのアメリカ独立革命 三浦 進

バイロンの詩に現われた天地観 下条 信敏

エリザベス・ボウインの短篇小説 石本 キミ

第12号 (昭和31・7)

大鏡用語の再検討 北西鶴太郎

読本作家の構成能力の問題(一) 目加田さくを

―八犬伝をよすがとして馬琴の場合―

古事記片々 倉野 憲司

「和歌八重垣」をめぐる 古田 東朔

楳取魚彦自筆「土佐日記県居説」(下)

第13号 (昭和32・3)

エッセー 河瀬 嘉一

Shakespeare の Sonnets の諸問題 中島 源治

キーツと「詩人の名声」 福間 欣一

「学制時代」に於ける女子教育の発見につ

いて―文部省年報を中心とした検討―

家庭科裁縫の学習指導について 秋枝 蕭子  
町田 恭三

故小林保太郎教授の追憶 村井 観亮

第14号 (昭和32・7)

源氏物語論攷 目加田さくを

―紫式部の姫君形成(一)―

無常観の克服 井手 恒雄

代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異 古田 東朔

大鏡用語の再検討(その二) 北西鶴太郎

皇典文彙と榎田駿 倉野 憲司

「梅花歌」序の成立と作者 前田 淑

―吉田宜の書簡を中心に―

第15号 (昭和33・3)

ミセス・ハナ・モーアとブルー・ストッキ

ング・クラブ 石本 キミ

「嵐が丘」の戯曲性 柴田 稔彦

荀子性論管見 米田 登

一般教育の理念 村井 観亮

On Henry James's The Bostonians 福間 欣一

第16号 (昭和33・10)

興福寺大法師等の長歌私注 倉野 憲司

日本小説発生論の序論 目加田さくを

―先行文芸の存在その(一)―

つれづれ草と無常観 井手 恒雄

「會根崎心中」成立前夜 松田 修

―道行の詞章をめぐる―

日本文典に及ぼした洋文典の影響

―特に明治前期における― 古田 東朔

源氏御談義(千鳥抄)(上)

第17号 (昭和34・2)

非嫡出母子関係について 安部 弘

アメリカの独立は「内部革命」か否か

―ロバート・E・ブラウン教授の見解を

めぐって― 三浦 進

黒白の対立を主題とする愛の悲劇

―「オセロウ」の一考察― 小島 信之

「トロイラスとクレシダ」論 柴田 稔彦

―二元的理解への試み―

ハーバート・リード 糸藤 洋

―その「叛骨」をめぐる―

ホレリス・マンの女子教育観及び実践につ

いて 秋枝 蕭子

性格形成に於ける一つの問題 町田 恭三

第18号 (昭和34・11)

八・九世紀の文芸活動と帰化人の問題(一)

—漢文芸極盛期将来の要因を探る—

目加田さくを

無常観・無常感

井手 恒雄

—秋成と庭鐘と—

再び送り仮名について

倉野 憲司

ゴトシといふ語の形態と位相

春日 和男

—今昔物語集の用例二三—

春日 政治

源氏物語の俗訳本

春日 政治

「ソダタキ・タタキ」管見

福田 良輔

新訳華嚴経音義私記の直音注音

鈴木真喜男

中務内侍日記と京極為兼

久松 潜一

晶子と鉄南・雁月

塩田 良平

—未発表晶子書簡を通じて—

成瀬 正勝

芥川 谷崎の小説論争観

成瀬 正勝

第19号 (昭和35・2)

Shakespeare の Sonnets における

Metaphors の明暗

Timon of Athens の謎

感動と思想のあいだに

—Keats の場合—

T.S.エリオットとハーバート・リード

Edna St. Vincent Millay の詩壇進出につ

いて

続・えっせい—ルキユブレーション—

ウォーにおける幼児性—「道化」の文学を

めぐって—

Hemingway とその Humanism

大学に於ける全人の育成と一般教育科目の

統合

アメリカ合衆国憲法の制定をめぐる二つの

見解

子の監護教育について

「教育令及び改正教育令発布前後の女子教

育」—文部省日誌及び年報を中心とした

検討—

家庭的諸条件の人格発達に及ぼす影響

Shakespeare の Sonnets における

Metaphors の明暗

Timon of Athens の謎

感動と思想のあいだに

—Keats の場合—

T.S.エリオットとハーバート・リード

Edna St. Vincent Millay の詩壇進出につ

町田 恭三

第20号 (昭和35・12)

中世の詩精神—宗教的世界観の呪縛とそれ

からの解放—

琴の家伝と俊蔭一門の造形

山上憶良新見

長嘯子血縁の人々

源氏御談義(千鳥抄)(下)

第21号 (昭和36・3)

V・ウルフの小説における時間と空間

—To the Lighthouse の Fluidity—

HAMLET から MACBETH へ

—悲劇世界の成立(その一)—

「魔の山」

Notes on Adult Education

中島源治教授追悼

下條信敏・後藤武士・千々岩好子・森

岡栄・小島信之

丸田 敬

森田 弘

福間 欣一

井手 恒雄

目加田さくを

倉野 憲司

松田 修

石井 康一

石井 康一

第22号 (昭和37・2)

国語学国文学特輯

中川喜雲・人とその作品

松田 修

九州紀渡唐僧日記考

目加田さくを

仏心風雅渾融説批判

井手 恒雄

日本書紀のかな「汗」

鈴木真喜男

あやまち二つ

倉野 憲司

第23号 (昭和37・3)

Shakespeare と Mannerism

小島 信之

HAMLET と LEAR

丸田 敬

— 悲劇世界の成立(その二) —

石井 康一

小説におけるジャンルの展開

石井 康一

— V・ウルフの「波」について —

元田 脩一

フォークナーの「熊」

元田 脩一

— アメリカ小説の二元型 —

元田 脩一

An Introduction to the Grammatical Studies of The New English Bible

糸藤 洋

第24号 (昭和38・2)

平安貴婦人のサロン文芸考 目加田さくを

— その一 呼応形式の文芸形態 —

「菊花の約」の論

松田 修

— 雨月物語の再評価(2) —

「この一筋につながる」(芭蕉)の意味

— 宗教的世界観の呪縛とそれからの解放 —

井手 恒雄

三巻本色葉字類抄の漢字音標記 (一)

鈴木真喜男

— 直音音注について —

鈴木真喜男

新刊紹介 井手恒雄著「平家物語論」

金原 理

第25号 (昭和38・3)

悲劇世界の成立(その三)

丸田 敬

Edith Wharton の小説

石本 キミ

“The Age of Innocence” についての覚書

覚書

“Three Songs” by Hart Crane

福間 欣一

ヘルマン・ヘッセと政治

根本 道也

— キリスト教系女子教育研究のしおり —

— 明治時代プロテスタント系女学校について —

秋枝 蕭子

大学生と漢字の書き誤り

町田 恭三

第26号 (昭和39・3)

日本人の貧困とわび・さび

井手 恒雄

ティークの芸術童話「友だち」

根本 道也

老人と少年の世界

— The Old Man and the Sea について —

馬場登美子

第27号 (昭和40・3)

上代人の表記意識と用字法

鶴 久

— 万葉集の訓法をめぐって —

源氏物語 その(一)対偶律

目加田さくを

「つれづれ」の意味

井手 恒雄

絶対王政下における「法服貴族」

梶原 愛巳

— モンテスキューのイデオロギー的基礎 —

根元悪 青木 隆嘉

転換期に立つアメリカ女子教育

秋枝 蕭子

ブルームズベリー・グループと芥川龍之介の

「筋のない小説」論に関するノート

石井 康一

危機の芸術 小島 信之

A British View of the New Criticism

糸藤 洋

第28号 (昭和41・3)

甲陽軍艦小考

松田 修

— 纂輯者と取材源 —

源氏物語論 その(一)

対偶律 (承前第二回) 目加田さくを

二巻本色葉字類抄における字音注の所在

および直音音注 鈴木真喜男

取について 青木 隆嘉

「ノーザンガー寺院」 石本 キミ

— ジェーン・オースティンの諷刺の手法 —

V・ウルフの小説のリアリティについて

石井 康一

危機の芸術 (その二) 小島 信之

第29号 (昭和41・12)

徒然草の「草子」的性格 井手 恒雄

上代人の表記意識と用字法 鶴 久

— 万葉集における之字をめぐって —

「外人法および動乱法」とフェデリリスト

の勢力失墜 三浦 進

「鹿鳴館時代」の女子教育について

秋枝 蕭子

L・ティークのシェイクスピア論

— その二 — 根本 道也

Keatsと「不安定」の世界 福間 欣一

Max Deutschein's Aspect Theory

宮原 文夫

第30号 (昭和42・3)

虚偽の世界 青木 隆嘉

「法の世界」におけるモンテスキューの方法について 梶原 愛巳

山本神右衛門常朝年譜本文篇 松田 修

L・ティークのシェイクスピア論

— その二 — 根本 道也

HAMLETの矛盾 丸田 敬

Anatole France et ses idées philosophiques 近藤 矩子

第31号 (昭和43・2)

朝日文芸欄の一面 助川 徳是

源氏物語論 その(一)対偶律 (承前第三回)

目加田さくを

中世の文芸・非文芸 井手 恒雄

— 中世日本文芸作品の取捨選択に関連して —

イーディス・ウォートンの小説

— The Custom of the Country —

Nietzsche-Legendeの後退 石本 キミ

恒吉 良隆

— 最近のニーチェ論争から —

The Imperfective Aspect of the

Expanded Form 宮原 文夫

Verbals in Piers the Plowman (II) : Gerund 田島 松二

Anatole France et ses idées philosophiques

— suite et fin — 近藤 矩子

HAMLETの宗教性 小島 信之

第32号 (昭和43・11)

啄木と折蘆 助川 徳是

源道済試考 五島 和代

フランス王政復古におけるジョゼフ・ド・メーストルの政治思想 梶原 愛巳

森有礼と女子教育 秋枝 蕭子

学業成績に及ぼす二次的要因の影響

総合的批評へ 町田 恭三

Verbals in Piers the Plowman (III) : Infinitive 福間 欣一

田島 松二

第33号 (昭和45・1)

筑前国志賀白水郎歌十首新解 倉野 憲司

—附福岡県内の万葉歌碑—

万葉集における正訓文字の訓法

—吾・我について— 鶴 久

柳亭種彦 土佐 亨

—一つの戯作者論—

対話の場所 青木 隆嘉

ニーチェにおける詩的形象と

Perspectivism 恒吉 良隆

Lear's Dream 或は 'Folly' 瓜生 善美

第34号 (昭和45・12)

和歌の機能 井手 恒雄

—時枝博士の文芸理論をめぐって—

源氏論攷・「近江の君」 目加田さくを

—風土的形成の特殊事情—

「金色夜叉」の一素材 土佐 亨

—宮のモデル—

「タイス」研究ノート 近藤 矩子

リンカーンと奴隷解放宣言 三浦 進

家庭環境の学業成績及び性格に及ぼす影響 町田 恭三

Huckleberry Finn 試論

—「河」を追いて— 飯田 正美

「ハムレット」：悲劇の構造 丸田 敬

ON THE USE OF THE PARTICIPLE

IN THE WORKS OF THE GAWAIN-

POET 田島 松二

第35号 (昭和46・12)

源氏物語論 目加田さくを

—幸福の形成—

「三人妻」の周辺 土佐 亨

—紅葉と読売新聞—

今昔物語集における使役の助動詞

—す・さす・しむの考察— 阪口 勝子

責任について 青木 隆嘉

森有礼とホーレス・マン 秋枝 蕭子

—「宗教自由論」を中心として—

リンカーンの再建計画について 三浦 進

ON THE USE OF THE GERUND IN

THE WORKS OF THE GAWAIN-

POET 田島 松二

第36号 (昭和47・2)

荷風の「江戸」ノート 助川 徳是

フランスにおける保守主義 梶原 愛巳

—ド・ボナールの政治思想—

中学における身体と性格 町田 恭三

「ハムレット」：悲劇の構造(承前) 丸田 敬

'Nothing Is But What Is Not'

—Macbeth 論のための覚書—

瓜生 善美

ON THE USE OF THE INFINITIVE

IN THE WORKS OF THE GAWAIN-

POET 田島 松二

第37号 (昭和48・2)

文学を通してみた「フランス革命」観 梶原 愛巳

—試論—

万葉集における正訓文字の訓法

—ニアリ・ナリと訓むべき有・在— 鶴 久

紅葉細見 土佐 亨

—雑考四篇—

「ハムレット」：悲劇の構造 丸田 敬

—3・狂気とプロット—

「オセロ」：'Love'と'Just'のブラドックス

—主として'Temptation Scene'に

ついて— 瓜生 善美

King Lear 覚書 小島 信之

一つの観念小説

石井 康一

モンテスキューと権力分立の「神話」

—V・ウルフの「夜と昼」について—

梶原 愛巳

Hart Crane と Walt Whitman の

森有礼とホーレス・マン

秋枝 蕭子

Columbus

福間 欣一

—庶民教育と教師養成について—

故近藤矩子助教授追悼録

(後篇)—

大塚幸男・三浦進・石本キミ

「魔風恋風」考

土佐 亨

第38号 (昭和49・2)

近代哲学と歴史(一)

青木 隆嘉

「舞踏会」試論

宮坂 覚

森有礼とホーレス・マン

秋枝 蕭子

—その構成の破綻をめぐって—

—庶民教育と教師養成について(前篇)—

L'Interprétation des Illuminations

〔資料〕「金色夜叉」

土佐 亨

中村 弘

—初出掲載および現行本対照表—

A Premise for Hamlet Interpretation

ニーチェの「運命愛」

恒吉 良隆

丸田 敬

—「永遠回帰」との関連において—

The Function Word there in Shakespeare

後期印象派とV・ウルフの小説

杉山 隆一

石井 康一

ポーシヤの 'Quibble'

瓜生 善美

—「ヴェニス商人」(1)—

The Counterfeit Presentment

丸田 敬

—An Analysis of the Sun-god

Imagery in Hamlet—

第39号 (昭和50・2)